慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜野文庫善本略解題(三)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1990
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.25 (1990.) ,p.211- 231
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000025-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜野文庫善本略解題 (三)

大沼晴暉

例言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、一cの函架番号が附される二十一点と、一dの函架番号が附される三点とを取上げ、略解を加えたものである。

一、一cに分類排列される名家手抄本は、抄略本が多いだけに、該書に記載の無い場合、その底本の判然しないものが多いことをお断りしておく。一dは名家手跡である。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。ま

た抄者や手抄された当該書については、人名辞書や索引・伝記・解題書・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。本稿は各専門家の精査を俟つためのもので、その呼水となれば幸である。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、本略解題は折を見て、随時継続発表の予定である。お気づきの点を何なりとお知らせ頂ければ幸甚である。

附記　本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

一c　名家手抄本

海埜石窓遺墨（題簽）韓彭英盧呉伝（漢書巻三四）附荆燕呉伝（同巻三五）一葉　海野〔石窓〕（豫介）書　大一冊

薄様紙

後補砥粉色表紙（二六・三×一八・七糎）双辺刷枠題簽に「海埜石窓遺墨」と書す。浜野知三郎氏の筆。巻頭「韓彭英盧呉伝第四（下部に大題）漢書三十四／正議大夫行秘書少監琅邪県開国子顔師古注」。単辺（二一・一×二九・八五〈表裏通〉糎）無界一二行二五字小字双行。小字は大字二字に対し三・四字ほど。全一七丁。次に「荆燕呉伝第五（下部に大題）漢書三十五／（以下注者題署前に同じ）」一丁のみを存す。横に朱又は墨点を打ち、眉上に校字が為さる。第九丁のみ朱句点あり。襯紙挿入さる、原料紙縦約二二・四糎。巻頭に陰刻朱印「浜野／知印」鈐さる。

本書には、末に「佐倉教官菱川先生著／正名緒言　全／秦嶺館蔵」と刻し、欄上に「嘉永己酉重刻」と横刻した双辺封面を刷印せる書袋を切開き、その裏面を縦に使って封筒としたものが、裏打修補の上、折込まれて綴じられている。それには「飯蔵御屋敷／矢部温之助様　御上邸／海野豫介／さし出／不領回教文几／封緘」の文字が見える。末端に「石窓先生壮歳所謄漢書潤退塾後以使賜之」の識語あり、以下の浜野氏の識語に見える矢部潤の筆であろう。次に、単辺有界一〇行、白口単白魚尾の墨刷罫紙に、浜野知三郎氏の識語あり。「此書海埜石窓所手写矢部潤識語／可以証矣潤号温叟石窓名豫倶仕／掛川藩太田公余購矢部氏之遺書／

数冊此書其一也／大正十年晩秋　穆軒居士（陰刻朱印「知／印」）」。浜野文庫には、「矢部温叟稿本」と外題された潤の稿本一冊が存する。

本書は識語に云う如く、掛川藩儒海野石窓が壮時の謄写本で、薄様に書写されるが、その底本については触れていない。荆燕呉伝が今一葉しか存しないが、元は本書以下の部分も存したかも知れない。韓彭英盧呉伝は奈良朝の写本が石山寺に存し、影印本も刊行されているが、本書とはやや出入がある。しかし小題を先記し、大題を後記する体式は旧い型式を遺存するものであることは間違いない。

海野石窓、松崎慊堂門。安政六年没、享年七十三。因みに封筒書袋の「正名緒言」二巻附録一巻は、菱川秦嶺（岡山）の著作で、嘉永二年の重刻（一月、江戸　和泉屋善兵衛刊、覆文化六年跋刊本）とあれば、此書面の差出時期はほぼ限定できる。飯蔵御屋敷とは愛宕下にあった下屋敷をさすか。ハ〇九―一c

―一―一

金光明最勝王経音義攷証　木村櫆斎（正辞）　文久三年三月写（森枳園等）　大一冊　薄様紙　森枳園書入本

紺色空押卍つなぎ表紙（二六・二×一七・九糎）貼題簽に「金光明最勝王経音義攷証」と書す。枳園の筆。安政六年己未八月朔木村正辞志「金光明最勝王経音義攷証序」二丁を冠す。巻頭「金光明最勝王経音義攷証／木村正辞学」と題署す。無辺無界一〇行二〇字小字双行。字面高約二〇・〇糎。句点（第八丁裏より二三丁裏迄朱）訓点朱引朱圏点を附す。まま朱校字あり。折山表丁下部に丁附を書す。尾題「金光明最勝王経音義攷証」。序・本文通二七丁。第二八丁表に、正辞再識〔跋〕一丁、裏に「右金光明最勝王経音義攷証一巻、櫆斎木邨氏／所著、其一葉至八葉第五行半、廿四葉至廿八葉、吉田市之進／所写、其他余所自鈔也、蓋此書、體攷古今、音証彼我、／精覈可従矣、但有与余説少異其意者、則標記／于欄外、以備他日遺忘耳、／文久第三暦癸亥季春念五日書於読未能読／　書屋　枳園拙者森立之（朱句点）」の識語あり。此識語の示す通り、上層に「立之案」等とした枳園の案語・書入が多い。首に「森／氏」の朱印を鈐する。薄様のため、各葉に藁半紙挿入さる。

本書編纂の経緯は、正辞の自序に明らかである。

一日友人横山由清、袖古鈔仏経音義一冊、訪予茅屋、取而閲之、其巻尾題云、承暦三年己未四月十六日抄了、其去今也幾八百年、然今之所見者、摸本而非原本也、原本也者、

旧源真清所蔵、今伝在某侯云、惜乎巻首一行係白魚災、失于題名、不知其為何経音義、然毎巻存品目、因探索諸閲蔵知津、而始知為金光明最勝王経音義也、其字音則不依西土之反切、直用仮字、而明某字為某音、至如其三内音撥仮字、以レ丿二体、而別字牟二字、……義門……顕昭……太田全斎……本居氏……慧琳……按慧琳音義巻二十九、有此経音義、今採校讎于此、而如其所引用之書、有間不与今之伝本合者、然慧琳所見者、即皆隋唐旧籍、故並従本書之所引、不敢妄改、若其漏脱訛謬、以竢来哲、（人名・書名・年号に朱引あるも省略）

本書は、此序の如く、かつて山川真清が蔵し、後新宮城主水野忠央の許に入った、白河帝承暦三年四月十六日の書写年紀を有する本の転写で、原本は今大東急記念文庫が蔵し、影印に附されている。

もともと注釈である音義類は、古来我国では、辞書の如くに用いられることが多かった。

木村正辞、国学者、後東大教授、大正二年没、享年八十七。伊能穎則・岡本保孝等に学を受け、漢学にも関心が深い。蔵書家として知られ、本略解題にも既に此人の蔵書を用いて対校したとの記述が一再ならず見える（一a―一三―一「日本紀私記提要」　一b―一三―二〇「古今著聞集」等）。蔵書は大東急記念文庫と東洋文庫にほぼ折半された。八〇九―一c―二―一

金光明最勝王経音義攷証補　森枳園（立之）　文久三年三月写（自筆）　半一冊

砥粉色表紙（二三・七×一六・一糎）貼題簽に「金光明最勝王経音義攷証補」と書す。枳園の筆。巻頭「金光明最勝王経音義攷証補　枳園森立之録／金光明最勝王経音義／第一巻」と題署す。単辺（一九・六×一三・三糎）有界一〇行下象鼻粗黒口の単黒魚尾墨刷罫紙使用。行二三字内外小字双行。尾題「金光明最勝王経音義攷証補」。全六丁。首に「森／氏」の朱印を鈐する。末に立之跋二則並びに息約之の識語が書かれているので、全文を録する。

高著一巻熟読沈吟音攷彼我體証古今義理精覈／間不容針若活用之所施遠深余亦同好黙思不禁遂忘／諭陋写出素心君忍一笑以加披尋再垂教示幸々甚々／癸亥季春念五午零日是辛未立之欽諗／　偶書于辛未日与義浄入竺歳其支干正合矣不亦／　奇縁乎立之又誌／（以下下部に小字で書さる）文久三癸亥季春之晦夜三更灯下独坐謄写了其／家大人自書本送

木邨正辞今感此副本于家　約之

此約之の識語によれば、立之自筆本を木村正辞に送り、約之謄写本を副本として残した如く読めるが、本書は立之の筆である。本文は前掲標記とほぼ同じながら、巻四「勺」の項で、出典を前掲標記では「医心方新修本草」とするのに対し、本書では「皇国医方書旧鈔李唐遺巻」とするなどやや出入があり、巻三の「闐」巻六の「暴」等前掲標記には見えるが、本書には存しない。

森枳園、本稿(一)に既出。八〇九―一c―三―一

雑記（外題）　〔服部〕栗斎抄録　自筆　半一冊

渋刷毛目表紙（二二・九×一六・一糎）左肩金砂子散し貼題簽に「服部栗斎先生自筆」（後人の筆）と書し、その右に「雑記」と打つけ書あり。右肩に「五雑俎　厤（ママ）史綱鑑／史論奇抄　韻学瑚璉」と目録外題打つけ書。扉罫紙中央に「史論奇鈔」と書し、下に「栗斎／主人」の陰刻朱印押捺さる。始めに「五雑俎」と題しての抜抄、第二八丁、版心上象鼻中央を墨筆で黒口の如く塗り、中縫に「備問」と書す。第二八丁裏「歴史綱鑑補」と題し、眉上に「備問」と書さる。両者左右双辺（一九・二×一二・九糎）有界九行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用、行二一―三字ほど。句点朱墨圏点を附す。五雑俎では、まま事項等を標記し、事部・地部等の部分けに傍線を施し、訓仮名等を附す。五雑俎・歴史綱鑑補合三六丁。天地断裁され、為に標記やや切取らる。五雑俎は寛文の和刻本（修本あり）が存する。歴史綱鑑補三九巻は明袁黄の撰で、寛文の和刻本があり明治期迄刷印されている。

次に単辺（一八・六×一二・五糎）有界一〇行白口墨刷罫紙を用い、行二〇字ほどに以下の史論を抄す。

張釈之論　蘇軾

賈生論　司馬光

仝　楊時

秦論　蘇軾

読孔子世家　王安石

孫武論　蘇軾

商君論　蘇軾

斉高帝欲等金土之価　袁皓

姚宋論　蘇轍

張釈之論・秦論白文、他は全て朱句点を打つ。全一三丁、但し第一三丁白紙。史論奇鈔は、かく題された史書が存する訳では

なく、自らの史観に参考すべきものとして、抜抄した文章に附した題名であろう。

次に、清廟維天之命維清時邁臣共噫嘻武「韻学瑚璉例言」三丁を抄し、「韻学瑚璉／第一韻（一第九韻）」を録す。本篇は無辺無界九行二一字内外小字双行に書さる。字面高約一九・六糎。例言には朱句点が附さる。全四丁。清刊本あるか。

末に以下の識語あり。第二行以下一格を低す。

此書服部栗斎先生自筆也先生名保命字佑甫一号旗亭／通字良平梅圃先生男也村士玉水門人江戸糀町住／寛政十二年五月十一日没年六十五葬於麻布善福寺墓碑頼杏坪撰／于時天保元年六月十六日　三浦若海（花押）

首に「栗垒／主人」「馬島杏雨／臧書之印」の陰刻朱印二顆押捺さる。杏雨江戸住、詩・書で知らる。

栗斎は崎門の儒者。三浦若海の識語に云う如し。但し、別号旗峯。ハ〇九―一c―四―一

史氏備考　医林　初集第二　〔原念斎〕編　写（〔大久保一翁〕）　大一冊

後補焦茶色表紙（二七・六×一九・八糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「史氏備考医林」と書す。扉（元表紙ならむ）に、本文と同筆にて「原芸菴　原芸渓　奥山立菴　吉田林菴／井原道閲　千田玄智　香月牛山／後藤艮山　望月雷山　望月三英／望月崙山　林一烏　加藤謙斎／小川雲語　香川太冲　越雲夢／北山林翁」と目録が書され、左に「史氏備考　医林　初集二自寛永二十年至貞享四年」と題さる。裏に別筆にて「大久保一翁自筆」と識す。無辺無界一〇行二一字小字双行、字面高約一九・七糎、白文にて以下の碑銘・伝記類を抄す。全二七丁。

原芸菴墓碑銘（享保元年歳丙申十一月）　伊藤長胤

雲渓原君墓碑銘并序　井孝徳

官鑒謙徳院法印奥山氏碑　林信篤

井原道閲墓誌　伊藤長胤

故医法眼大円堂先生墓碑　物茂卿

香月牛山先生墓碑　服元喬

雷山先生墓碑　服元喬

望月君三英法眼碑銘　林信言

医官崙山先生墓碣銘（文化十有三年歳次丙子九月）　成島司直

林一烏伝　望月三英

加藤謙斎先生伝略（明和戊子孟夏三河宝飯西郡弟等謹書）

小田雲仙　長沢養圭

雲語処士小川君頌徳碑　井上立元

故法眼雲夢越公墓碑　服元喬

故北山林翁墓碑　男懿恭

元裏表紙に「慶応元年乙丑初夏／大久保君より到来也」の識語あり。

先哲叢談の編者でもある原念斎の未刊写本「史氏備考」四五巻の中、巻二三医林初集第二を抄出したもので、扉の目録外題に記された吉田林菴・後藤艮山・香川太冲の三名の伝は、本書には存していない。因みに静嘉堂文庫蔵の写本も同様であるが、本文にない三名には、目録中に朱の鉤点が附されている。

大久保一翁、幕臣、勝海舟等と共に幕政に参与し、維新後静岡県知事・東京府知事・元老院議官等を経、子爵。石泉と号す。明治二一年没、享年七十二。八〇九—一c—五—一

喪礼略　〔荻生徂徠〕（物茂卿）　文政五年一〇月写

（〔渋井〕太室）　大一冊　図入

香色表紙（二六・三×一七・五糎）双辺刷枠題簽に「喪礼略　物茂卿著　渋井太室写」と書す。後人の筆。扉本文同筆にて、「喪礼畧」と書す。裏に「川同／米一閲」の墨印あり。巻頭「喪礼略／物茂卿　著」と題署す。無辺無界一〇行二〇字小字双行、漢字片仮名交り、字面高約二〇・三糎。全一一丁。裏表紙見返に以下の奥書が記さる。

喪礼略一弓徂徠先生所著偶獲一本／而忽卒謄写畢覚間有闕誤俟他／日得佳本訂正焉耳／　文政壬午初冬之日太室識

喪祭については、礼を重んずる儒者（特に崎門）によって、幾つかの著述が為されているが、刊行されたものは少い。徂徠には、「喪（葬）礼略」或いは「喪（葬）礼考」等と題された、漢文二種・漢字片仮名交り文一種、計三通りの同名異書がある。その詳細については、三種の影印又は翻字を収め、解題を附する、みすず書房の「荻生徂徠全集」第一三巻等を参照されたい。

版本は、明和五年八月刊本・鶴岡の致道館蔵版本の二種あるが、内容同様で、漢文。何れも著者没後、江戸後期の版である。明和版は全集未著録。断句。首に、明和戊子中元之日安藝平賀晋人撰「葬礼考序」を冠し、末に「附訳」を附す。「明和五年戊子八月」の年紀の後に、「藝州広嶋平田屋町柏原屋／摛藻堂　村田平七刊行」の双辺木記あり、序者平賀中南（本稿㈡に既出）の地元広島での地方版で、所在は餘り知られていな

い。故長澤規矩也氏蔵本が、「影印日本随筆集成」第十二輯（汲古書院刊）に収められている。片仮名交り文のものは、図入り。写本で伝わるのみ。

渋井太室、佐倉藩儒。天明八年没、享年六十九。ハ〇九—一c—六—一

職原名目鈔（尾題・題簽）　寛政二年二月写（〔狩谷棭斎〕真末）　大一冊

後補布目地渋刷毛目格子文様覆表紙（二七・三×一九・二糎）双辺刷枠題簽に「職原名目抄狩谷棭斎手録」と書す。香色元表紙貼題簽に「職原名目鈔　完」と書し、「青山」の朱印押捺さる。遊紙二丁あって、直に「上濁下清」と本文に入る。無辺無界六行、四段に記載。小字で音注あり。「真末云」「綱正先生曰」「乾綱正先生口授」「広橋伊光卿御口授」等の傍注書入が存する。まま朱連合符・訓仮名あり、朱にて濁点を表示す。尾題「職原名目鈔」。巻末に以下の奥書一丁あり。

右一巻壺井翁口授日坂氏令恩借写之／　元文三戊午秋九月下旬　含章斎／右借赤井氏之蔵本終書写之功云／　延享二年乙丑之秋　度会常典／右予朋藤原美雅謄写贈于小生者／寛政改元冬十二月二十日／　源朝臣綱正／右以　綱正先生所蔵之本書写者／寛政二年（年の字〇を打って挿入さる）春二月廿六日　真末

末に遊紙二丁綴じらる。本文七丁。首に「青裳堂臓書」「青山」の朱印二顆押捺さる。

本書は職原抄に見える官職等の清濁を示す書。識語によると、もと本稿㈡既出の故実家壺井義知の口授にかかり、転々乾綱正より若き日の棭斎が書写したものである。棭斎此時年十六。名古屋大学皇学館文庫の、元文五年六月、藤原親岑写「職原名目清濁鈔」は、内容本書と同一である。なお壺井義知には、数種の職原抄の注解書が存する。

狩谷棭斎、本稿㈠に既出。ハ〇九—一c—七—一

東里談　〔伊藤〕東里　寛政三年一二月写（〔狩谷棭斎〕高橋真末）　半一冊

黄土色表紙（二三・三×一六・三五糎）貼題簽に「東里談棭斎幼年所書」と書す、森枳園の筆。扉「東里談」これも枳園筆。巻頭「東里談」と題して、眉上に「仮々子」と朱筆にて項名を標記す。無辺無界一八行、字面高約一八・四糎、漢字片仮名交り。朱引、朱筆にて校字・圏点・引用符を附す。漢文の引用箇所には、まま訓点・送仮名・訓仮名・朱句点等あり。末に

「右一冊以大邑淳卿之蔵書謄写之早／尓時／寛政三年雪月中澣　高橋（真末の花押）」の奥書を記す。全八丁。首に「青裳堂臧書」「森／氏」朱印二顆鈐さる。

伊藤東涯の三男東所の子、東里の随筆の抄記で、以下の各項を収む。

小普請金ノ丁・コクセンヤノ丁・ウミタケノ丁・入梅ノ丁・（クロソンブツ）・華陽夫人ノ丁・ギヤマンノ丁・倭語漢訳ノ丁・明星ノ俗言ノ丁・八朔ノ丁・月番ノ丁・カハセ金ノ丁・ヤカラカ子ノ丁・カイテウノ丁・小児ノ戯ノ丁・栢珓ノ丁・五臓図ノ丁・御神系ノ御丁・帯鉤ノ丁・キヨクハチノ丁・クカイト云丁・軟障（ゼンヤウ）ノ丁・正字通ニ瑕アル丁・競馬ノ丁・巫女ノロヨセト云丁・尺八ノ丁・ナケシノ丁（八朔ノ丁まで、眉上に朱筆にて項目名を標記す。本文中の項目題は、筆軸を以て朱印し書さるるも、第一項と眉上に「クロソンブツ」と標記ある二項は題されず）

東里を称する儒者は多いが、本書は、第三項「コクセンヤノ丁」中に「東涯（朱引あり）先生ノ説モ詳ナラス予別書ニ出スヘシ」、また「尺八ノ丁」中に「予先ニ堀君ノ許ニメ東皐ノモテ来ル長笛ヲ見シニ」等とあり、古義堂の学を継承した東里の著作なることが判明する。本篇は写本で伝わるのみ。前掲書書写の翌年、椹斎十七歳の筆である。ハ〇九―一c―八―一

重輯東萊呂氏古易音訓二巻　宋呂祖謙　写（渋江抽斎カ）大一冊　市野〔迷庵〕（光彦）等校合書入本

砥粉色表紙（二七・一×一九・一五糎）に直に「古易音訓」と書す。末に朱筆小字双行にて「曝書亭／文集」と注記ある「重輯東萊呂氏古易音訓序録」五丁を冠す。此序は、宋藝文志・東萊文集・書録解題・〔朱子〕文集・経義考等よりの引録集成になる提要。序末に以下の迷庵識語一丁あり。

光彦少習周易本義而疑其注釈簡略不如四書集註詩集伝之例焉後読朱子文集始知易本有呂氏音訓而朱子深取其説本義特釈其義也乃購求多年不能得也頃嘗読通志堂経解所載元儒鄱陽董真卿周易伝義会通音訓一書悉附経文乃抄撮成編以附周易本義後庶幾不背朱子之志焉又且節録先儒之説及于音訓者以証此書必不可闕也

寛政六年甲寅夏四月江戸市野光彦識

巻頭「重輯東萊呂氏古易音訓巻上（下）／金華　王辛叟　筆受」と題署す。左右双辺（一九・二×一三・二五糎）有界九行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用、行二〇字小字双行。版心上象鼻に

「古易音訓」と書し、中縫下部に丁附あり。眉上に朱墨藍にて校字あり、まま本文中の字を朱墨にて訂す。下巻脚欄に文言伝の前まで藍筆にて当該易の卦名を記し標目と為す。文言伝以下朱筆にて脚欄に章次記さる。また朱筆にて「此トコロヱ提書スヘシ」等、書写指定の辞も見ゆ。胡粉塗抹また切貼や誤字の上に紙を貼り、訂正が為さる。尾題「重輯東萊呂氏古易音訓巻上（下）終」。尾題前に、朱筆にて「文化十三年丙子夏五月以足利学所蔵／会通元本校合畢　市野光彦誌」の校合識語あり、裏に、同じく朱にて「朱子易本義次序／上経　下経　上彖伝　下彖伝　上象伝　下象伝／繫辞上伝　繫辞下伝　文言伝　説卦伝　序卦伝／雑卦伝（以上十二篇）」と記さる。なお本文中の易の卦は印を用う。巻上二一、巻下通四四丁。

迷庵の識語によれば、本書は、壮年の迷庵が若きより多年捜し求めた宋呂祖謙の古易音訓を、通志堂経解中の元董真卿の「周易会通」に見出し、抄出して一編としたもので、二十三年を経た後、足利学校蔵の元刊本との校合を為した。その本を、恐らく、迷庵の弟子である渋江抽斎が書写したものであろう。大部分が抽斎の筆になるが、一部迷庵の自筆書入箇所がある か。尚迷庵自筆本は、森枳園より楊守敬の取得する所となり、現在台湾の故宮博物院に蔵されている。序末の迷庵識語は、年紀を始め「文化乙丑正月」と署し、見せ消ちにて前記した如く訂正されている。迷庵の未だ李唐考勘の学に入らざる頃の為事である。阿部隆一氏「（訂増）中国訪書志」等参照。ハ〇九―一c―九―一

雑抄（外題）　豬飼〔敬所〕（彦博）抄録　天明六年七―一二月写（自筆）　半一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二四・一×一七・〇糎）に直に「雑抄」と書す。表紙見返に「橘窓茶話（雨伯陽）　古学別集／非物（五井蘭洲）　非徴（中井竹山）／杕（ママ）桑名賢文集（林義端）／　右五部抄」と目録を記す。巻頭「橘聰茶話（雨森東著、天明丙午刊行、七月二十四日、豬彦博抄焉）」と題さる。一〇丁。次に「古学別集抄／丙午仲秋初九／豬飼彦博摘抄」と題して、写本で伝わる、伊藤蘭嵎編「古学先生別集」巻四の「日札」「読近思録鈔」の抜抄六丁。次に「非物篇抄（次行小字双行にて一格を低し、「非物篇六巻、大阪五井純禎著、墓誌曰、……宝暦十二年卒、寿六十六、」）」と題し、第一四丁表一行迄。次に追込で、「非徴（大阪中井積善、字子慶、号竹山、著非徴八巻、続非物、）」と題し、一〇丁。末に「丙午冬閏十月随読随抄／豬飼彦博」と署さる。此二書の題意は、非物茂卿・非論語徴で、共に徂徠物氏の学を難じた著。天明

四年に合せ刻されている。最後に「榑桑名賢文集（元禄中京師書林林義端編集）」と題し、三丁。末に「右丙午季冬下四夜灯下摘抄」と記さる。本文集は元禄一一年の刊、後宝永元年には詩集が刊行されている。佐藤直方四書便講序・安東省菴四書道徳総図序・伊藤維楨送片岡宗純帰柳川序・伊藤長胤贈吐山又菴帰郷序・長胤春秋正朔辨・伊藤維楨漢文帝除肉刑論・貝原篤信時宜論を録す。

本書は無辺無界一〇行二一字内外小字双行、字面高約二〇・四糎に記され、句点が施さる。古学別集抄はやや謹直だが、全巻行書体の抜抄で、「茶話」には標記・按語が見られるが、他は「非物篇」に二箇所ほど標記あるのみ。巻頭に「豬飼／敬所翁／遺書」印を鈐し、「是初年ノ抄書／不載」と朱筆にて記せし貼紙あり。

本抄記は、近江の出で京で学んだ敬所が、郷土ゆかりの雨森芳洲や、京・大坂の関西名家の随筆・文集類から、随読随抄した所謂雑抄で、二六歳の筆に為る。本稿㈠でも触れたが、こうした雑抄類は、一見とりとめのない記述のように見えるが、抄録者にとっては宝の函で、詞華集・備忘録・辞書・索引的な役割を果たしていた。江戸期の学者は、自己の学文を為す一方で、終世この作業を続けた人が多い。また筆録者の興味や関心も知られ、その学や人間形成を知る上で、後人の又とない参考書ともなる。

以下豬飼敬所の雑抄が続く。敬所、本稿㈡に既出。八〇九―一c―一〇―一

敬所先生経書抄（題簽）　豬飼〔敬所〕（彦）抄録　嘉永三年写（自筆）　半一冊

後補濃紺色表紙（二四・六×一七・一糎）双辺刷枠題簽に「敬所先生経書抄」と書す。扉の如くに「嘉永三庚（三庚の二字後から挿入さる）戊年正月念一始／四書餘論（以下三行に「論語済／孟子済／中庸済」と書さる）／雑著／豬飼彦纘」と書せし断簡を貼附す。

本書は以下の八葉の断簡の貼込帳である。

詩経　葛屨履霜之篇
　　詩豳風七月篇
春秋伝　桓公三年有年　宣公十六年大有年
大学　君子以財興身小人以衆財亡身
詩経　采葑采菲無以下体
論語　無為而治者夫無乎公治長初（題名のみ。棒線を以て抹消さる）

礼記　里有質軾

詩経　甘棠篇

孟子　是故無賢者也

無辺無界、字面高約一八・一糎に書写さる。原料紙高約二〇・五糎。扉の部分に「豬飼／敬所翁／遺書」の朱印押捺さる。

題署にある「纘」は纂と同じ意味であり、且つは前人の業を継ぐ意も持つので、敬所が四書の先儒の諸説を抜抄纂編して、一書と為さんとしたそのノートの断簡であろう。扉の「済」は、四書餘論の編修作業が、論語・孟子・中庸については終ったの意か。但し本書はあくまでも経書断簡の貼込帳で、扉もその一部に過ぎず、本書の惣名を示すものではない。ハ〇九—一c—一一—一

御題朱彝尊経義考〔抄〕　〔豬飼敬所〕（彦博）抄録　自筆　半一冊

黄色地に中華都市図を刷出せし艶出し表紙（二二・九×一五・六糎）貼題簽に「豬飼敬所翁手鈔御題朱彝尊経義考」と篆体で書す。扉「御題朱彝尊経義考抄」と題す、後人の筆。扉裏に「校正スミ」の貼紙あり。巻頭「御題（〇印朱筆）朱彝尊経義考」と題さる。扉裏に「経義考御題アリ御題／トハ乾隆帝朝書ニ題スル／詩ナリ此詩即是ナリ」の貼紙あり。巻頭上層には「此書皆／不可載」と朱書せし貼紙を附す。第二—三丁表に「経義考総目」あり、裏丁より本文を抄録す。双辺（一八・九五×一三・三糎）有界一〇行、白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用、行二〇字小字双行。朱墨両筆の句点・圏点あり。ままに「彦博按」として、本文中に小字双行にて按語を附し、校字・標注が三箇所ほど存する。後の敬所遺著刊行のための編纂者のものか、貼紙あり。全二三丁。首の遊紙に「竹清蔵」、扉に「豬飼／敬所翁／遺書」の朱印押捺さる。本稿㈠既出の、竹清三村清三郎旧蔵。

清の朱彝尊の三〇〇巻（原闕巻二八六・二九九・三〇〇）にわたる尨大な経書解題からの抜抄。清乾隆刊本等がある。ハ〇九—一c—一二—一

義門読書記抄他　〔豬飼敬所〕（彦博）抄録　自筆　半一冊

香色表紙（二二・六×一五・九糎）に直に「義門読書記抄」と書す。見返上部に「豬飼敬所」と記せる貼紙、同じく下部に「不載」と朱書せる貼紙あり。巻頭「義門読書記抄」と題し、一格を低し小字双行にて同書の解題を記す。詩経上永懐堂本・史

記汲古閣本・前漢書・後漢書・論語禘自既灌而往者章・穀梁春秋・公羊春秋等と題して抜抄し、第三三丁表第三行に「右何義門読書記」と記さる。清何焯撰「読書記」五八巻からの抜抄。清乾隆刊本が存する。

次に追込で、「易緯通卦験云、……」等として、易緯通卦験を抜抄し、「按」「彦博按」等と按語考証を附す。第三五丁表迄。「後漢志注易緯晷景与清本通卦験不同今考勘如左」とし、辞句の考勘あり。

第三五丁裏より、「史通通釈　清南杼秋浦起龍二田釈／内篇」と題し、抜抄。此書には、清乾隆刊本が存する。一格を低し、小字双行にて按語を記せるあり、左に引録する。

圖裴松之有言、凡記言之体、当使若出其口、辞勝而無実、君子所不取也、此語可概此下諸篇、○夢渓筆談載慶歴(ママ)中河北大水、有公事使臣到闕、仁宗召問水災何如、対曰懐山襄陵、又問百姓何如対曰如喪考妣、上嘿然、既退詔閤門、今後武臣奏事、並須直説、読此因触及之、不覚失笑、北平云、信史務在紀実、語従其実、史法也、

本書は、双辺（一八・九五×一三・三糎）有界一〇行白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用。行一九字小字双行。まま句点朱引が施され、胡粉での訂正が見られる。史通通釈には、出典箇所や注記が細字で傍書さる。全四九丁。ハ〇九―一c―一三―一

〔和学辨抄〕　〔豬飼敬所〕抄録　自筆　大一冊

後補焦茶色表紙（二六・〇×一七・八五糎）双辺刷枠題簽に「敬所先生雑抄」と書す。巻頭題署なく、直ちに「謝肇淛か五雑俎にいにしへ長命の人を集たる処に日本／紀武内三百歳と書たるは……」と、本文が記さる。以下「和学辨に又曰円珠経上下巻注は何晏か集解首書に／明経博士の注あり……」、「又曰ひとゝせ長崎にて唐人の旅館より……」、「又曰伊勢物語に春日の里に知るよしして……」、「又曰少納言通憲の撰れし本朝世記は希代の珎書也／……」、「又曰三代実録板行の書は脱簡甚た多し……」、「海上のナダを灘の字を書は誤り也灘は瀬也ナダにあらす／新古今集に／　紀ノ貫之か曲水の宴せしに……」、「又曰コソバユシスグツタヒなと〳〵云字は痒の字也医書を／読人のカユシトばかり覚へたるは誤りなりカユシと云は癢／の字也……」、「又曰一樹の蔭の雨やとり一河の流を汲む事も是皆他／生の縁也といふ事……」、「又曰天下泰平国土安穏と云事……」、「又曰九月十三夜月をもてあそふ事菅原後集を／引て……」の全十一項が抜抄さる。

本書無辺無界一二行（第三丁は一一行）、字面高約二二・〇糎、白文、三丁。襯紙挿挾まる。原料紙縦約二四・二糎。第一丁裏より、項頭に朱筆で○印が打たる。

本抜抄は全て、第二項に記されている「和学辨」からの引録である。和学辨は、江戸の儒者で徂徠学の篠崎東海の著で、宝暦八年の版本もあり、大田南畝の編になる叢書「三十輻」にも収められている。八〇九―一c―一四―一

蘇子由古史抄〔豬飼敬所〕抄録　自筆　大一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二五・一×一七・三糎）左側やや中央よりに、直に「蘇子古史抄」と書す。裏表紙を表紙の書脳部まで廻し、包背装の如くす。巻頭「蘇子由古史抄」と題す。無辺無界一〇行二〇字小字双行。字面高約二〇・一糎。句点を附す。胡粉による塗抹訂字あり。全一七丁。巻頭下端に「此書皆不／載」の朱筆貼紙あり。上層に「豬飼／敬所翁／遺書」の朱印押捺さる。

本書は、宋蘇轍撰「古史」六〇巻よりの抜抄で、その序跋も抄記されている。「古史」は宋刊本以来諸版あるが、敬所が見たのは恐く、清嘉慶の掃葉山房刊本であろう。八〇九―一c―一五―一

荀子〔抄〕〔古賀侗菴〕抄録　自筆　大一冊

後補縹色表紙（二五・八×一八・一糎）双辺刷枠題簽に「洞（ママ）菴先生抄荀子」と書す。後述する青黎閣の罫紙一丁を遊紙とし、巻頭「荀子」と題さる。双辺（一二・九×一七・七糎）有界九行白口単黒魚尾、下象鼻に「青黎閣」と刻する墨刷罫紙使用。行一六字内外。白文。全三丁。巻末に同上罫紙二丁遊紙として綴じらる。全巻襯紙に裏打さる、原料紙高約二四・七糎。

本書は、荀子中の辞を、○印を打ち、追込で抜き書きしたもの。今試みに巻頭を示せば、儒效篇第八よりの摘録で、

荀子

效門室之辨○図廻天下於掌上○厭旦／○屑然蔵千溢之宝○是杼々亦富人已

「荀子」は、和刻本も附注本を含めて、侗菴在世時に三種存する。

古賀侗菴、本稿㈠に既出。八〇九―一c―一六―一

松陰筆記（題簽）〔古賀侗菴〕（古心堂）抄録　自筆（社約山本禎写）　半一冊

薄黄土色表紙（二三・〇×一六・一糎）貼題簽に「松陰筆記」と書す。巻頭「贈詩小引（題下に心儀韋佩と篆体小字で

記さる)」と題し、末に「陳夢雷 夢雷陳印 太氏史」と署されし引に続いて、沈徳潜・王鳴盛・銭大昕・王昶・呉泰来等唐人の詩文を録すること四丁。単辺(一九・〇×一三・五糎)有界一一行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行二〇字内外小字双行。句点が施さる。

次に扉の如く、左肩「張宛丘治原論」と書す。内題「治原論」。無辺無界一〇行二〇字。字面高約一八・二糎。断句。六丁。

次に「白熊賦有序」「道聴漫記(傍点朱)」各三丁。左右双辺(一九・五×一三・五糎)有界一〇行白口単黒魚尾、下象鼻に「愛月堂」と刻する墨刷罫紙使用。行二〇字。白熊賦には朱筆にて句点・校字訂正が為さる。道聴漫記は白文で、朱墨の校字あり、首に「一日予門木通生過昌平橋見一老生与負薪叟抵/掌劇談還為予説之覚其言較近理因録以蔵于篋/甲申正月」と記さる。

次に「盛夏餐雪賦有序以夏無伏陰為韻」「中秋月蝕得灰 古心堂」「維年月日友野瑛謹以酒脯之奠祭于南畝大田先/生之霊、嗚呼先生之名満於天下、」に始まる文、末に「文政癸未秋九月」の年紀ある「諸葛孔明比管仲楽毅論贈梶原山中二大夫 朝川景(ママ)」の四篇一〇丁を綴ず。無辺無界一〇行二〇字、字面高約一八・一糎。句点が施さる。但し「中秋月蝕得灰」は白文。「盛夏餐雪賦」の序に、「加侯以六月吉、献雪於 幕府、歳以為常、又以頒賜諸臣、藩士曽田某、与予善、今茲癸未、餉予一器、餐之、頓忘炎熇之苦、因為之賦、」とある。

次に「社約」、末に「辛巳六月 山本禎撰」とあり。「既脱稿畢社/主浄写他日呈之 劉先生乞正毎会以是為定/式」等あれば、山本禎が伺菴に添削を乞うた稿本であろう。前掲愛月堂罫紙(早印)に、同じく行二〇字に書写さる。白文。別筆。全二丁。

次に以下の詩文を録す。五・七言連句・冰雲社詩抄出(裕堂・景山・秋浪・拝石・柳渓・烏洲・鱗川・碧筠・翠巌・桃野・秋帆・練塘・霞舟・玉匡・松陰等の名見ゆ)・登富士山記 鬼(ママ)道 沢元愷撰(末に「明和六年七月望後三日」の年紀あり)・作文譜論選古文第二条・慈悲心鳥詩 述斎・夏日雑詩 樫宇・秋園寓奥邀霞舟同賦五首 後二首係次韻 篁園・同前 崑崗。五言連句四段、七言三段書。無辺無界一〇行二〇字(七言連句二一字)小字双行。断句、連句のみ白文。夏日雑詩迄一五丁。「秋園……」は初出の罫紙一丁に行二〇字に書かる。断句。

次に次下の詩文を録す。豊洲六言・話故事（末に小字で「右見続説郛中近峯聞畧」と書さる）・本（末に「右見蘭林閑窓／雑録」と小字双行に記さる）・題子美草堂　趙清献・全題・曽陸授受（天民書示）・遊玉河記・題古梅園墨譜・答友人某書・信玄謙信論・創業守成難易論・題壺碑搨本・北魏孝文論・王制所言中国幅員断長補短僅々三千里而禹貢東漸西被朔南所暨乃似於今日之広輪何歟、秦漢拓地稍大、至胡元而極矣、明清承之、各有蹙闢、不知今之輿地比王制幾倍、請聞其大略、・孟子集註千乗百乗後偽議其失考、至於貢助徹注、亦嘖有煩言、其得失如何・駱駝賦・万餘巻楼記（末に「文政丁亥二月二日書於湯洲官舎之古心堂」とあり）・題西園雅集図二首　菅晋帥・自詠二律　朝川昇（ママ）・以下詩・連句等あり、履堂・野村君玉・猪養斗南・佐藤大道・菅礼卿・楢原茂・片山直・林祭酒・櫻宇林子・篁園・独立・西城講員柴邦彦等の名見ゆ。次に「松前矣下墅観牧士戯馭歌」、巻末木冰文政丙戌元旦・丙戌元旦・乙酉歳暮の詩に終る。三四丁。無辺無界一〇行二〇字小字双行。字面高約一八・〇糎ほどに書さる。断句。題西園雅集図二首以下一丁白文。

巻首に「藤印／忠淳」、巻首・巻末に「白楽邨／荘衣笠／氏図書」の朱印を鈐す、衣笠豪谷旧蔵。

一部他筆を含む侗菴の詩文ノートで、作詩作文や策問等の参考用であろう。自作あり、師弟同僚の他作あり、所謂雑抄ありで、書写の体式も必ずしも一様でない。ハ〇九―一c―一七―一

易学啓蒙合解評林抄・諸書抜抄（外題）　〔豬飼敬所〕

（彦博）抄録　自筆　半二ッ切一冊（仮綴）

本文共紙表紙（一二・三×一七・三糎）に直に「易学啓蒙合解評林抄」と書す。巻頭「易学啓蒙合解評林抄／諸書抜抄」と題し、第六丁表に「右合解評林七巻毛利貞斎撰」と記さる。第六丁裏「字義」と題さる。諸書より、「皇侃論語疏云」「〈四大奇書第一種三国志演義第五十六回、」「晏子春秋曰、」「物茂卿中庸解云、」等として抜抄し、ままに「彦博曰」等の按語を附す。書写の体式異るも、無辺無界一三―一五行ほど、行一四字内外小字双行。句点を附す。ままに抹消箇所や圏点・鉤点等あり。全一六丁、後半七丁ほどは徂徠の中庸解よりの抜抄。巻頭に「豬飼／敬所翁／遺書」の朱印鈐され、見返に「不可載」と朱筆にて書されし貼紙附さる。

毛利貞斎の「易学啓蒙合解評林」は六巻、享保五年の刊本がある。徂徠の中庸解は、「学庸解」として、大学解と共に刊行

された、宝暦三年の刊本が流布している。

三国志演義は明の所謂羅貫中本と、清の金聖嘆本系とがあり、後者が通行した。我国には明・清の諸版本が舶載されているが、和刻本はなく、元禄五年の釈文山の訳本が存する。此書は後の「通俗物」の祖となった。白話は、五山僧を始め緇衣の好む所であったが、江戸中期、京で古義堂、江戸で護園の学派に、かかる唐話・白話の学が流行する。敬所が見たのは「四大奇書第一種」とあれば、清版であろう。晏子春秋四巻は元文元年の和刻本がある。ハ〇九—一c—一八—一

二程全書抄　豬飼〔敬所〕（彦博）抄録　天明七年三月写（自筆）　半一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二四・三×一七・一糎）に直に「二程全書抄」と書す。書背を料紙で覆って貼り、包背装の如くす。巻頭「二程全書抄」と題す。無辺無界一〇行二一字内外小字双行、字面高約一九・九糎。第一丁裏よりは、抜抄せる文頭を一格抬頭して標記す。抬頭部字面高約二一・二糎。句点・圏点を附し、ままに不審紙あり。「巻六十八、続附録、菴辨論胡本錯誤書、晦」等と小字双行にて、抜抄出典箇所を記す。末に「丁未季春　猪飼彦博抄」と署さる。全三二丁。首に「豬飼／敬所翁／遺書」朱印と、「此書皆不／載」の朱筆貼紙あり。

明道・伊川両先生の二程全書は諸版あるものの、宋朱熹編明徐必達校の六八巻本が江戸前期に覆刻された。しかし本刊本は巻四二—四五の伊川易伝の部分を欠き、後貞享四年に追刻して単行、また合印された。ハ〇九—一c—一九—一

呂氏春秋目録　〔豬飼敬所〕　自筆　半一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二三・八×一六・八糎）中央直に「呂氏春秋目録」と書す。反故紙使用。書背を料紙にて覆って貼り、包背装の如くす。巻頭「呂氏春秋目録」と題し、巻之一孟春紀より巻之二十六士容論まで、各巻毎に追込で目録を記す。無辺無界一〇行二〇字小字双行。字面高約一九・七糎。全八丁。裏表紙も反故紙使用。首に「豬飼／敬所翁／遺書」朱印押捺さる。

本書は、百科の風ある大部の書の目録を作り、一種の索引としたものであろう。覆明宋邦乂・徐益孫校本、覆清乾隆畢沅校本の二種の和刻本が刊行されている。ハ〇九—一c—二〇—一

駆睡録・雑録　〔豬飼敬所〕（彦博）　自筆　半一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二四・一×一七・一糎）に直に「駆睡録」と書し、その右に「雑録」と訂さる。前書と同様の装訂。巻頭

「伊藤長胤盍簪録抄」と題して抜抄、第六丁表に「以上盍簪録」と書さる。東涯の随筆にして、写本で伝わる。盍簪は素早く集まる意。友の会合等にも云う。

次に諸書から抜抄し、「彦博曰」「博按」「彦博按」等として、按語を附す。抜抄されし諸書以下の如し。「△晋書列伝四十二、郭璞伝曰、」「△徐文長雲合奇蹤、第二十一則、(徐文長に引出線を書き「各謂明人」と注す)」「△西漢演義巻三」「△五雑俎十六」等々。本篇按語多し。

晋書は、明の南監本を覆刻し、志村楨幹の訓点を附した元禄の刊本(修本あり)が存する。西漢演義は東漢演義と合刻され、明清版が存する。雲合奇蹤も明清各種の版が多数存するが、二書共に和刻本はない。何れの版に依ったかは不明ながら、敬所がかかる講史・俗小説の類にも目を通していた事が分る。尚敬所は抜抄してはいないが、前出篠崎東海の「和学辨」中には、雲合奇蹤に言及する所がある。

本書は無辺無界一一—一四行、行二二字内外小字双行、字面高約二一・八糎に書写さる。句点・圏点を附す。抜抄本文の頭に○或いは△印を記す。字面高は此印よりの計測。「○△彦博曰」等と朱○印を記すあり、書写の体式も全巻必ずしも同様ではない。全一五丁。第一五丁裏は、裏表紙見返に貼附さる。表紙右肩に「豬飼/敬所翁/遺書」朱印押捺さる。

旧題の駆睡録は睡りを追払う意であろう。本稿で取上げた雑抄類から、各人が睡りを節して、読書勉学に励んだ様が如実に窺えるが、一方、題名の睡の字もまた真実であったのではないか。ハ〇九—一c—二一—一

一d　名家手跡

雲煙集(名家筆跡断簡等貼交帖)　写　菊一冊

第二回内国観業博覧会出品目録第五を用い、表紙(二一・九×一五・九糎)全面に半紙を貼附し、直に「雲煙集」と書す。遊紙一丁あって、名家筆跡断簡を、同書に半紙を貼り、その上に貼附す(まま直に貼れるもあり)。断簡は頁の表裏両面に貼附さる。五五丁。もと菊判洋装本なれど、背の糊はがれ、紙縒にて仮綴さる。

浜野氏製作の名家筆跡断簡の貼込帖にして、欠題・欠名の葉片多く、誰人の手跡か知られぬ物がある。碑拓・金石文の写し

や、諸按・考証、備忘・覚書のメモ類の断片も多い。一部連接すべきが、間をおいて貼られている箇所がある。

文頭や題署・年紀等の見える物を挙げれば、以下の如し。唐芮公豆盧寛碑（石墨鐫華）・末に「狩谷棭斎先生曰殆唐韵亦非一本歟与二／書亦不同是則不可考矣」とある音韻や文字に就きての考証―此辺小島宝素の手か・稲生翁画像賛（貼附のうえ折込まる）・懐風藻跋（羅山集五十五）・大日本国図行基菩薩所図也（貼附のうえ折込まる）・案漢書藝文志書有六體……（篆体、康熙五十五年歳在游兆涒灘余月銭塘汪立名書於自餘居）・処今世而欲貫三代之文非金石奚攷然碑碣為風雨所剝蝕……（嘉慶十有五年歳在上章敦牂季春之月呉趨雨楼王理跋）・印譜・石刻城柳神所守駆厲鬼出匕首福四民制九醜（元和十二年柳宗元）・少林寺碑末―此辺棭斎の手ならむ・第廿五番　高屋連枚人墓志二通・紀友則等の和歌四首（貼附のうえ折込まる）・墨池堂選帖巻四（宋蘇文忠公書・宋黄文節公書・蕪湖県学記六十五行・宋蔡忠恵公書各々の右肩に合点を附す）・覆刻瘦本繹山碑跋（享和元年十一月十四日棭斎望之志）・本草綱目木部相思子・蘭山啓蒙相思子・相思子・本朝衮衣十二章之辨（末に「此一冊ハ乾綱正君ノ考書ナリ……寛政四年四月廿一日　真末敬誌」とある、棭斎十八歳の筆。尚前出一c―七並びに八番本参照）・孔説十二年・鄭説十二年・廿音・泰山下明堂（摩経室集）・主右軍筆経（拓）・慮俛銅尺建初六年八月十五日造・五月念一／羽倉用九拝遣／小島賢契／座下（牘）・名物六帖・永和九年歳在癸丑暮春之初会于会稽山陰之蘭亭脩禊事也（拓、子昂）・喀霊芝贈人・霊樞度・惟善重題〔蘭亭帖定武刻本〕・開元十年李文安石渓図銘（易州前遂城県書助教梁高望書）・三礼図所見方相氏・韓詩外伝巻七（貼附のうえ折込まる、桜井友／拝／内田先生）・英国倫敦万国衛生博覧会日本文部省出品説紀（明治十七季五月、刊、篆体、同書の扉か）・銖両等の考証・九経字様補字・楊升菴墨池瑣録云（竹雲題跋、原書裏頁に直に書さる）・本郷小法師造並びに本郷文華園記とある筆等の銘札・孫々子々年其永宝用（拓、貼附のうえ折込まる、右衆議院所購彝器之銘／明治二十四年二月田修考）・余与楊井君蘭洲相識既餘二十年（文政甲申長夏上澣　江都一斎佐藤坦識）・知慎按（細井広沢ならむ）・岳陽楼記（安政庚申正月十一日　倉知正直書）・劉向新序雑事第三・印譜・題定本正続書譜（明和丙戌十一月／烏石葛辰識・戊子春日東都源師道識）・盧原温泉紀行 万菴題（題簽）・巻末裏頁に、直に浜野氏の筆に関する覚え、書さる。以下の如し。

○鵞 文魁堂 兼十体文雅堂 五雲筆文雅堂 小筆 小自在文雅堂 、玉兎毫小法師 ○揮月温恭堂 価十銭 ○掣電温恭堂 ○神品晋唐小楷 温恭堂 ○蜂腰文雅堂製

本貼込帖の題署は、必ずしも該人の書であることを示さない。例えば、椒斎の「覆刻瘦本繹山碑跋」や、羽倉簡堂尺牘・佐藤一斎の楊井蘭洲に就きての文等、恐く浜野氏の写しであろう。前半小島宝素、半は椒斎、後半浜野氏の筆で、其間に諸家の断簡が幾らか挿挟まれているようである。全体としては、椒斎のものが最も多い。大きなものは、一部折込みとなっている。

書名の「雲煙」は書画の筆勢の力勁く飛動する様を云い、書画集によく附けられている。現代の我々は、書と絵画とは別個のものと考え勝であるが、特に近代以前の東洋では、理論の上からもまた実践上からも、両者は不可分のものであった。ハ〇九—一d—一—一

〔大雅先生書千字文〕（帙題） 〔池大雅〕書 自筆 折二帖

上帖海松色地、下帖褐色地に草花文様を織出せる裂表紙（二九・六五×一六・七五糎）。右肩に「百廿二」と書されし反故二折あって、内題なく、薄墨で「天地」と大書す。右肩に「壱」と記さる。無辺無界大字二字、字面高約二五・五糎。上帖は壱より六十二迄、一二四折。下帖六十三より百廿五迄、一二六折。表紙・裏表紙見返に「湖東仏厳寺蔵」の墨印を鈐する。徴するに、阪田郡と蒲生郡に同名の真宗寺院が存する。湖東なれば阪田郡の寺か。

本書は、各句毎に墨色を換えた、大雅の楷書千字文。大雅書千字文は各種あり、影印も存する。

池大雅、南画・書・篆刻等で知らる。京の産で柳沢淇園門。伴蒿蹊の近世畸人伝に伝せらる。安永五年没、享年五十四。ハ〇九—一d—二—二

一枝堂了阿書（外題） 〔村田了阿〕 自筆 折一帖

濃縹色皺地表紙（一八・一×七・六糎）に金砂子を散らし、左肩直に「一枝堂了阿書」と書さる。消息文三種を、無辺無界、行六・七字ほど（字面高約一六・一糎）に書きて、一種の消息模範とせしものならむ。一三折。巻頭に「中川氏蔵」の丸瓦型朱印を鈐す。中川得楼旧蔵。中央に「一枝堂／了阿上人真蹟」と題せる、黄色布目地の書袋を作り、納入せらる。

参考の為、以下に全文を翻字しておく。

明後八日如儀以」皮祭夷講相兼」興行仕候間何之」風情無
御坐候へ共」自早朝御光駕」被下候様奉待候」頓首
甚寒之節に候」処愈御壮健に」被成御座奉共所」喜候然者
先頃」御誂申置候龍」紋羽織出来候」はゝ此よりしりへ御
」越可給候早々
新春之御慶不」可有尽期候先以」貴家御揃可被成」御超歳
目出度」申納候此鮮魚」一籃任到来呈」進仕候且御閑」隙
御坐候はゝ此意」御訊問被下度所」希候恐々

村田了阿、一枝堂と号す。了阿は法号。国学者なれど、和漢の学、また仏典に通ず。浅草煙管商の家に生る。天保一四年没、享年七十二。八〇九―一d―三―一